

第9回地域活動報告会 実施報告書

稚内北星学園大学
Wakkanai Hokusei Gakuen University

目 次

ごあいさつ	稚内北星学園大学 副学長 佐賀 孝博	1
1. 地域活動報告会概要 (講演録)		3
2. ポスター報告(報告資料)		22
3. アンケート集計結果		25
資 料		32

稚内北星学園大学副学長
事業推進責任者 佐 賀 孝 博

本学は26年度の文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に選定され、「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」というタイトルの下、全学的に地域連携活動に取り組んできました。その柱は次の3つです。

- ① 地域の教育力向上
- ② 観光まちづくり
- ③ 中心市街地活性化

今回の地域活動報告会では、COC事業の取り組みの一つである教員が地域課題について研究する「地域志向教育研究経費」を活用して研究された将来的に地域の教育力向上に繋がること見据えた発表と、中心市街地活性化の核となっている「まちなかメディアラボ（まちラボ）」のこれまでの成果、ならびにCOC事業に採択されたことをうけて科目数を充実させてきた地域について学ぶ「地域志向科目」のうち「地域学Ⅱ」についてその実践例の発表の3件の口頭報告のほかに、教育とまちづくりに関するポスター発表2件がありました。

口頭報告で触れられたプログラミング教育については2020年より小学校で何かしらの形で学ぶことが必修化されております。本学においても「教員免許更新講習」で関連科目を開講しておりますが、今後も本学の専門性を活かしつつ、教育現場の一助となるように努めていきたいと考えております。また、まちラボの活動についてはメディア表現指導員の精力的な活動もあり、利用者の方に好評をいただいております。報告にもあったように今後も利用者ニーズに配慮しながら、大学のアカデミックな面をアピールする場としても充実できるような運営を心がけていきます。地域志向科目の実践例については学生からも報告させていただきましたが、地域課題などについて大学で学んだ知識を用いて分析するなど、大学で得た知識を「まちを教室」にして活かした好例であったと思います。

ポスター発表は「地域志向教育研究経費」に採択された研究成果の発表でしたが、発表内容について参加者と発表者が意見交換するなどして成果の確認を行うことができました。

本報告会も学生が実行委員会に加わっており、学生による司会進行など役割をしっかりと果たしてくれました。こうした点もCOC事業が着実に成果をあらわしている一つの例だと思います。今後もさまざまな取組みを通じた学生の成長に期待していきます。

COC事業における地域活動報告会も残すところあと1回となりました。本報告会も報告会出席者の方々による事後アンケートではこれまで同様好意的なコメントを多数いただきありがとうございます。最後の報告会も皆さんに来てよかったと思われる機会となるように、日頃より学生・教員が地域を意識した活動を行ない、結果としてそれら活動の成果報告を行えることを目指してまいります。引き続き学内外の多くの方々からご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

1. 地域活動報告会概要（講演録）

地域活動報告会も今回で第9回を数える。COC推進委員会では、具体的な実施計画の草案を3月14日に提出し、同日実施計画を正式決定した。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ね、実施に至ったものである。

主 催：稚内北星学園大学

会 場：新館 1301 教室

日 時：平成30年6月26日（火）14時30分～16時00分

発表形式

口頭発表及びポスター発表形式とする。

第9回地域活動報告会実行委員会

Astha Century、伊藤良平、石尾美岬（以上、学生委員）・石黒志津・鏡山樹・石橋豊之（実行委員長）・中川圭太・三浦猛・向光宏

第9回地域活動報告会

口頭報告 会場：稚内北星学園大学 新館 1301 教室

第1報告

14:35～15:05

○ 報告者

小泉 真也(情報メディア学部 教授)

澁谷 久(情報メディア学部 教授)

佐賀 孝博(情報メディア学部 教授)

安東 雅訓(元情報メディア学部 准教授)

○ 報告題名

「プログラミング思考」とは何か

○ 報告内容要旨

2017年3月発表の新学習指導要領に、2020年度から小学校でのプログラミング教育必修化が明示された。これが狙いとするところは、プログラミング言語や製作環境の理解ではなく「プログラミング思考」を養うことであるという。しかしながら「プログラミング思考」とは何か、コンピューターの問題解決範囲をふまえると、その具象化・明文化は困難である。本件では「計算」の観点から、プログラミング思考とは何かを紐解く。

第2報告

15:10～15:30

○ 報告者

田村 龍一(情報メディア学部 准教授)

○ 報告題名

まちラボのこれまでとこれから

○ 報告内容要旨

COC事業の一環として、「まちラボ」は2015年4月に本学サテライト施設として中央商店街にて活動を始めた。本発表では、これまでまちラボが取り組んできた「地域貢献」「中央商店街活性化」のための各種事業を目的別に分類し、事業利用者の反応とともにその内容を検討し、得られた知見を共有することを主目的とする。そして、今後の「まちラボ」の方向性に対する提言を行い、幅広い方々から議論やコメントをいただきたいと考えている。

○ 報 告 者

安藤 友晴(情報メディア学部 教授)
横田 耕一(情報メディア学部 客員教授)
石橋 豊之(情報メディア学部 助教)
伊藤良平 (情報メディア学部 4年)
石尾美岬 (情報メディア学部 3年)

○ 報 告 題 名

COC 事業「地域志向科目」の実践~『地域学 2』を事例に~

○ 報告内容要旨

本学では、道北宗谷地域「で」学ぶ、あるいは道北宗谷地域「を」学ぶ科目を「地域志向科目」として設定し、展開してきた。その一つである『地域学 2』は、道北宗谷 地域「を」学ぶ全学必修科目であり、今年で3年目の開講となる。過去2年間は稚内・宗谷の第1次産業を軸に学習を行った。また、実際に現場を訪問、グループワークによる演習などアクティブラーニング(能動的学習)を中心とした講義形態である。本発表では、これらの概要を解説した上で、実際に受講した学生が意見・感想を述べる。

○司会 皆様、本日はお忙しい中、稚内北星学園大学COC第9回地域活動報告会にお越しいただきましてまことにありがとうございます。定刻となりましたので、始めさせていただきますと思います。

私は、本日司会を担当いたします稚内北星学園大学情報メディア学部情報メディア学科3年生の Astha Century です。不慣れではありますが、本日はよろしく願いいたします。（拍手）

まず、皆様に御確認がございます。この会の様子は、録画、録音、また、会場内を写真で撮影しており、報告書の作成などのために使用することとしております。この点につきまして、会場内の皆様の御了解をいただきたいと思ひます。よろしく願いいたします。

初めに、本学COCの事業推進代表者である齊藤吉広学長より御挨拶いたします。

○齊藤学長 皆さんこんにちは。いつも本学の地域での活動に御協力いただきましてまことにありがとうございます。この地域活動報告会も、今回で9回目を迎えました。地域の教育力向上とまちづくりで協働する知の拠点整備ということで、このCOC事業の5年間の補助事業の最後の年度を今迎えているところで、この地域活動報告会も今回と次回ということで一区切りになります。事業補助が終わってからも、本学や学生の地域課題への取り組みというのは終わるわけではもちろんありません。この後も続いていくわけですが、



も、きょう、それぞれの報告に対して、皆さんからの忌憚のない御意見をいただけますと、COCの事業5年間が終わった後も含めまして、今後どんなふうの本学が、あるいは学生が、地域で活躍できるのかということについて、いろいろな示唆になると思ひますので、どうぞ、きょうは最後までよろしく願いいたします。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

今回の報告会の報告は、口頭発表とポスター発表となっています。ポスター発表は学会等で用いられる発表方法ですが、なじみのない方もいらっしゃると思ひます。簡単に言いますと、ポスターに書かれた研究内容を参加者と報告者が時間をかけて検討する報告形式のことを言ひます。

口頭報告

第1報告

○司会 それでは、これから口頭発表を三つ行ひます。報告は、報告20分と質疑5分というふうになっております。

第1報告は、小泉真也教授と、ほか教員3名が『「プログラミング思考」とは何か』について報告いたします。

お願いいたします。

○小泉氏 ただいま御紹介にあずかりました稚内北星学園大学情報メディア学部教授の小泉真也であります。本日はよろしく願いいたします。

私のテーマは『「プログラミング思考」とは何か』ということで、これから発表してまいります。

その前に、発表に先立ちまして、皆様にアンケートを配りました。これは、この発表、私がプログラミング思考とは何であるかという提起をここで行ひますので、それに対する皆様の感想とかそういったものをお伺ひしたいと、それが、そのまま評価という形で資料となっていきます。それで、まだこちらをお持ちになっていない方がいらっしゃいましたら、後ほどお配りしますので、今発表のほうをお聞きいただけ

ればと思います。

それで、御職業をお聞かせください。ちょっと、きょうおいでいただく方の、何というのでしょうかね、状況、前提を想定していなかったところがありまして、御職業をお聞かせくださいというところなのですけれども、いわゆるア、イ、数学また物理を教えるというところがありましたが、情報の教員もいるだろうということと、あと、教師ということであれば、教員免許をお取りになる前、教員免許をお取りになるということが前提となっている、そういうことを目標にしている学生さん、生徒さん、こちらはアのほうに丸をつけていただければと思います。それから、2番に関しては、教育を受けて自主学習により、これは、どちらか当てはまるほうを選択していただきたいと思います。また、趣味でプログラミングを続けているという方、これは日常というところに含まれますので、2番、最も近いものということで御判断をいただければと思います。

それでは、発表してまいります。よろしく申し上げます。

『「プログラミング思考」とは何か』ということで、私どもの研究の発表です。

背景といたしまして、2020年度から小学校でプログラミング教育が必修化ということが打ち出されております。なかなか昔は考えにくかったことでありますが、ひょっとしたら、おうちでお父さんがお子さんにプログラムの問題がわからないといって教える時代が来るのかとか、あとは、昔だったら5球スーパー程度であれば、ラジオとかですね、ああいうものであれば、教材、教具ということでお金ちょっと出せたかもしれないのだけれども、コンピューターを買わなければならないとか、ロボットを買わなければならないのかとか、そういう時代が来るのかよくわかりませんが、とにかく、このプログラミング教育が必修化するという中で、当然、教育現場には教える人が必要ということになります。では、教える人がいるのか、その前に、では、どう教えるかというその教え方が確立されているのかということ。あと、恐らく、このプログラミング教育という概念について、筋道やアプローチというのが正しく伝わっていないのではないかと、まして、何がよい教育メソッドであるかということは、まだまだ、ひょっとしたらほぼ誰もわかっていないという状況なのではないかなというふうに思っています。恐らく、その前提たるプログラミング思考、ひょっとしたら、これを説明できる技術者もないのではないかと。かく言う私も、プログラミング思考とは何であるかということを変更して説明できる状況にはありません、それぐらい理解はしていない。何となく、プログラマーが考えていることがプログラミング思考なのではないかなというぐらいのことだったわけです。だけど、プログラミング教育という中では、プログラミング思考を理解する、プログラミング的思考を理解するということが教育目標になってくる。では、プログラミング思考というのは何であるかということなのですが、ここで少しずつ、そういう状況下なので、紐解いていこうというのが今回の目的であります。

コンピューターでプログラムを書くということであれば、コンピューターというのが、とどのつまり、計算機という形で理解されます。ですから、問題解決は演算によって行われると。そうすると、数学との双方性、あとは、人とは異なる言語、思考過程というのがここにはやってくるということになるでしょう。その数学的思考というものが、では何なのか、数学との双方性とか、数学に準じてということで、では、数学的思考なんていうのも昔からかなり議論されてきて、ようやく確立しかかっているところですが、これも長い時間を必要としました。ですから、プログラミング思考を理解しようとか言いながら、そのプログラミング思考というのが確立するというのはまだまだ恐らく時間がかかるものだと思います。

それで、プログラミング教育に対して幾つか誤解されているということがあるようですので、ここで少し明らかにしておきましょう。

一つ目、このプログラミング教育というのは、プログラミング言語を理解させるものではありません。プログラマー育成が目的ではないからです。社会を生き抜くために、時代を越えて普遍的に必要な力、先の見通しが難しい時代に、この必要になる力をプログラミング的思考というふうに文科省の担当者は説明しております。では、このプログラミング教育を通じて育成すべき資質・能力がプログラミング的思考なのであれば、それは具体的に何であるかといったらば、論理的に考えていく力であり、いわゆる手順

ですね。あとは、思考の巡りとして、課題発見・改善の図式化、こういったことができるようになるとう
いうことがプログラミング教育のねらいであります。

また、プログラミングという教科ができるわけではありません。教科書、ありません。評価、ありませ
ん。既にある教科の中で、学年時間単元数は学校にお任せということで、例えばこのようにさまざまな事
例を提示しておりまして、あとは学校で考えてくださいというのがプログラミング教育のこれからの成り
立ちということになります。

あとは、これが一番意外かもしれませんが、特に端末、これを必要とするものではない。極端な話しす
れば、コンピューターは要らない、でも、プログラミング教育というのはできるというふうな話です。よ
くよく考えてみれば、情報端末というのは思考しませんので、情報端末眺めてプログラミング思考とい
うのは、どうも、要は、端末から学べるものでもなからうし。

あと、アンプラグドというふうに言われていますが、プラグレスという言い方をここではいたします、
ちょっと事情がありまして。ここでは、専用ツールの利用であったり、教具をつくったり、あとは紙と鉛
筆を使ったり、体を動かしたり。

プログラミングの言語構造というのは、プログラミングの言語構造に従った手順ですね、先ほど出てき
ました手順の概念を理解しましょう。プログラミング言語というのは、おおよそ順接、分岐、反復。順番
に、それから何か条件で分かれて、あとは繰り返す。あと、補助作業に対して一つ名前をつける。あと、
そこに入出力を伴うなんていうふうな形で構成してあります。そういう論理のみで、話、問題解決を組み
立てていくということが要求されるということです。

では、以上の前提からプログラミング思考というものを探っていきましょう。

エンジニアがプログラムを書く。それで、問題の何をどういうふうに考えているかということです。

まず、言語化は必須であります。ですから、わかっているのに説明できないということが間々ありま
す、わかっていることは説明できたほうがいい。観察した事実を記述します。プログラミングは言語で記
述するからです。あとは、言語、その言語というのは日本語なのか、英語なのか、プログラミング言語な
のか、断片的でも図でもいいですので、通じさえすれば何でもいいということにしておきましょう。あと
は、数学にならって、数学との違いから考えていきます。評価としては、その問題解決が理想的であるか
どうかは、計算機を使いますので、演算、数値化ができるかどうか。今、数値化できるかだけではなく、
将来数値化ができそうかどうかということが、その手段の評価にかかわってきます。あとは、ただ対象
の都合のみを重視する。要は、人の都合ではありません。処理をする対象、例えば、ここ、ロボットを持
ってきましたが、そうしたら、どこまでもロボットの都合を考えてあげないといけないということになる
わけです。

プログラミング、情報学は、数学の一部として離散数学を構成するものであるということ、それから、
状態制御を書く、物理的な制約をかけた演算でもある、これは計算機の仕組みからです。あと、効率、効
果を追求するものとしても位置づけられます。数学の定義とか定理、そういったものに対して、そういう
定理、公理が想起できないような斬新な手法というのが生まれる可能性もあるだろう。あとは、プログラ
ムというのは、一度つくったものは、なるべく再利用を意識しようということなので、一度説明をつけた
ものは、次の概念のためにとっておこう、そういうような意識を持つ。

幾つかの事例を出していきます。

ロボットを真っすぐ走らせよう。ロボット、人の言葉はわかりません。真っすぐ走ってというふうに願
ったって、しゃべったって、真っすぐとは何だかもわからないし、走るということの概念自体がわからな
い。すると、もう仕方がない、ロボットのことをよく観察してやるしかないのです。すると、どうやら、
タイヤがあって、タイヤは、これはモーターなのですけれども、モーターにつながっている。左右につ
いたモーターが回ると走り出す。では、モーターが回るには何が必要だということになると、電気が必要で
ある。そのモーターはコンピューターのどこかにつながっている。例えば、これを観察すると、実は、こ
のケーブルは、電気を出力するこの穴のところにケーブルで、がちっとながっています。あとは、走

るというのは電気の強さということで考えることができ、あと、何で真っすぐ走るのだろうかというときには、実際にやってみるとあれなのですけれども、左右の歩幅が同じだからということは体験的にわかります。ということは、曲がるということはどうなのだろうかということ、左右の歩幅が違ったら、歩幅の短い方向に曲がっていくということも体験的にわかります。結果、真っすぐ走れという命令は、ロボットにとって、電気をどこから左右のモーターそれぞれに、どんな強さで、ここ、数値です、あとは、どこからというのは、この出力先に割り振られた番号というふうに、ここにも数字出てきます。そういう問題になります。ここまで観察した事実に基づいて、プログラムというか、モデルを記述することになります。言語、例えば、このロボットなんかは、動作を実現するブロックを組み合わせてプログラムを記述するという、そういうプログラム環境がありますので、決して、キーボードを打って言葉でというふうなことで、そうでないとロボットが動かないということでもないのです。

物理空間の制約の話の先におきます。

極論的にコンピューターの仕組みというのは、記憶領域、メモリがあって、これは線形の構造であり、一直線上の構造であり、記憶できるのは数字だけであると。では、コンピューターは何で文字とか音とか色とかが扱えるのかということ、その文字、音、色の構成要素それぞれに数値を割り当てて表現しているからです。名義尺度なんていうふうに言います。この数値は、主にラベル、名前で呼び出すか、場所の、そこに書いてある値として参照します。一度記録した値は、上書きなど、意図的に消すまで消えません。あとは、記録したものに基づいて処理するために、処理に用いる数字、数値は、処理が終わるまでこの空間上に残り続けなければなりません。要は、消えてしまうと計算の道具としては使えないということです。あと、これはアナログとデジタルの違いですが、一つの区間に複数の数値を記録することはできません。紙だったら、小さく書けば幾らでも書けるのに、なのですね。そういうところが物理的な制約ということになります。

もう一つ、メモリから、そこに並べた数字を計算するために演算装置というものがあり、その間にキャッシュメモリというのが挟まっていて、この間で数値のやりとりをします。キャッシュメモリとは、定着した記憶のメタファー、比喻であります。そして、計算は、この記号です、「:」「=」というふうに主に定義づけられていることが多いのですが、XとYを計算したときに、今のXとYを計算し、その結果はXに上書きしてくださいということを意味します。こういう方程式というのはなかなか書きません、使命演算なんて呼ばれます。要は、記憶する場所を三つとか四つとかというふうではなくて、少しでも減らすために、その計算結果を計算される数のほうに上書きするというので、このXのほうの状態が変わっていくという形で演算、計算は提示されていきます。

さて、今の話から、九九の計算というのをちょっと思い出してみましよう。例えば、5掛ける2が10だ、では、何でそうなのだというその理由のために、わざわざ時間を費やす必要はプログラミング思考ではないのかもしれませんが。我々、この表ですね、あれだけ必死になって覚えました。ですから、そう記憶したからというのも理由としては否ではないということです。プログラミングにおいては、ここにテーブル、対応表があって、そのデータ表に対する対応関係として解釈することができます。

数を数える、この山、タイルは幾つあるのでしょうか。ざっと観察すると、上から1個、1個ずつふえながら11段までということになります。11個までということになります。高さ11段あります。そうすると、これは、上底1、下底11、高さ11という台形の面積として解決するか、それとも、この上にゼロ個という、12段目というか、ここにゼロ個があって、それであれば三角形の面積として解決することができます。これは美しいやり方ですが、例えば各段に1個、2個、3個なんていうふうにやって、では、11個、ここまであったから、1から11までの総和という問題で解決することができるでしょう。よくやったのは、昔ですね、1から10までの総和って、全部足したら幾つだ、55って、何回も経験していると覚えてしまうわけです。すると、ここまですら55だったら、そこに11を足すというので解決するというやり方もあるでしょう。とはいえ、一個一個数えていくというやり方も間違いではありません。実はコンピューターアルゴリズムには、しらみつぶし法とか総当たり法とか、いかにも効率の悪そうな方法と

というのが、ちゃんとアルゴリズムとして確立してあります。これが何でいいのかといたら、コンピューターに乗っかるかどうかというところが問題になります。コンピューターというのは演算が速いですから、多少人間の手間がかかったとしても、コンピューターだったらそんなに時間かからないので、まあ、これはいいだろうという話になってくるわけです。

ただ、何をもって、数える対象を四角であるかというその説明ができなければならない。言葉にしなければならないからです。すると、何を探すのかというときに、この四角と同じものを探そうという、同じ形が見つかったということであれば、この問題は認識の問題として解決することができます。ただ、コンピューターというのは結構厳密にその比較とか演算というのを行いますので、コンピューターと照らし合わせたときにモデルとなるこの四角に対して、サイズがちょっと違ったということで、見つからないという可能性があるかもしれません。ここはデメリットのの一つとして理解をしておかなければならないということです。

であれば、黒をスタートとして、黒から白へというまたぎを何回やったか、白から黒へ、ではなくて、黒から白へというまたぎを何回やったか、その行ごとにですね。したらば、そうすると、黒って何だ、白って何だという話になるわけです。そうすると、今度は、明るいところなのか、では、暗いところというのは明るさがゼロということなのか、ちょっとこれも問題がありますが。では、明るさが最大とかは何だろうか、そういうふうにと考えると、基準となる値を、しきい値を設定して、それ以上、未満だったら、黒、白というふうにしておけば、黒、白のまたぎ、その回数を数えるということが出来る。それで、この個数は6回ですね、白から黒へというまたぎができます。けれども、この画像が白黒のごま塩状に汚れていたとしたらば、コンピューターは処理を誤るかもしれません、そういうデメリットの理解は必要です。

さて、話は変わりますが、次の事例は、値を交換する、です。AとBにあるこの値を、次の状態でこういうふうに変換したい、次というか、最後の状態でこういうふうに変換したい。だけど、ここから値が消えてはいけないということなので、すぐ次の状態のときに、ふっとひっくり返るということはあるというか、そういうことは考えては、考慮には入りません。どこかに残り続けなければいけないのです。ですから、残っていない状態から、いつの間にここに来たのかということは考慮には入らず、そういう方法は考慮には入らず、そのプロセスの説明が必要になります。

例えば、その値を消すことなくですから、Aを逃がすための、Bを逃がすための空間、TMPとかというふうに変換をします、これを用意して、Aをコピーして、BをAに上書きをして。そうしたら、逃がしたAの値はTMPに入っているんで、TMPをBに上書きしてやれば、TMPは使いませんが、AとBという局所的な話をすれば、交換は完了したということになります。

では、回避空間を使っちゃいけないというふうに変換をかけたらできるでしょうか。これは、できます。初期状態、こうです。BはAからBを引いた値で上書きをしてください。ですから、5引く3で、2で上書きしました。次に、Aは、今のBですね、これに対して、今のAから今のBを引いた値で上書きしてください。5引く2で3が入りました。この3は、この3です。最後、Bは、BプラスAを上書きしてくださいということで、ここでも、要は、逃げる場所を使わなくても交換というのは完成、完了するわけです。

交換するというのはどういう意味かということと、それを実現する方法というのは、また別個のものとして考えよう。交換とは、このような演算を3回することではないですね。位置が変わることです。ですから、そういう意味で、手段というのは、その定義、定理に対して、不可逆的な説明というものが出てくる可能性があるということになります。

円の面積なんていうこと、これも小学校の教科書なんかで幾つか出てきたもの、しばしば出てくる事例であります。円を扇形に等分する、その等分した扇形は四辺形状に互い違いに並べる、この等分が細かくなっていくと、四辺形というのはだんだん長方形に近づいていき、収束した状態として示されるのは、完璧な長方形ということになるのだろうなということになります、もっと細かくしていくと。そうすると、こうなるだろうなという長方形に対して、ここは円周も半分であり、ここは半径でありということで半径ですね、あとは、ここは円周で、こっちは円周の一部、こっちとこっちが同じだから円周の半分というこ

とになります。となると、長方形に対して「円周の半分×半径」ということで整理すれば、「半径×半径×3.14」、円周率ということになります。

これも、再利用ということを意識したときに、こんな考え方が出てきます。その収束、四辺形に収束するのではなくて、長方形に収束するのではなくて、例えば同心円状に分割して、その分割した同心円を、ぴやっと皮をむくようにして、皮をむいた状態で、その円周をどんどん並べていくと、積んでいきます。今、皮は厚いですが、どんどん薄皮にしていって、ぱあっとはがしながら開いていくということをしてしまおう。こいつは、ちょっと、どういうふうに、ぴっと開けばいいのか。ここからここまでは半径ということになります。あとは、ここですね、今一番外側、一番外側というか、全部これは、はがすものは、円周ということになるわけです、円周を積んでいきます。となれば、同心円がふえる、分割数がふえれば、その円周を積んだ形状というのはだんだん二等辺三角形に近づいていきます。すると、最後は恐らくこうなるのです、きれいにいくと。すると、もう、円周というのは本当にもうぴやっと薄い皮をぱあっと積んでいった感じになるのでしょうか。となると、この状態から、ここは、対象となる円の円周長であり、ここは半径である、積んだものは、びらびらはがしていった円周ということになります。まずここから、円の面積というのは、「円周長×半径」、三角ですから「底辺×高さ÷2」とかというふうに出てきます。これを整理していくと、最後に求められるのは「半径×半径×円周率」ということに、そういう導き方がなされます。

ここで、例えば、この概念ですね、円の面積は円周を重ねたものというふうに言いましたけれども、これは、後にわかりやすく再利用できそうだなと。微分、積分なんていうのがありました、円の面積というのは πr^2 なんていうふうになるのですけれども、これ、よく、何というのですか、パズルっぽく、テクニカルな話で、これ、Rで微分してという、ここにある、べき乗の数字を前に出して、べき乗の数字を1個引くというふうにすると、でき上がるのは円周の長さの公式です。では、これを積分したら、円周を積んだら面積になるみたいな、そういうことですね。だから、円の公式を導くという事例は、ひょっとしたらこちら、四辺形だけでなく、この三角形の、円周をむいて積んでいくというメソッドなんかは、もうちょっと強く打ち出したほうがおもしろいかもしれません。

ここで、まとめたいと思います。終わりです。

プログラミング思考というのは、まだまだ魑魅魍魎としておりますが、人がプログラムを設計するときの思考過程がプログラミング思考というふうに考えられるだろう。では、それは何かというと、どこまでも対象寄りの姿勢であり、コンピューターは数値を扱うものであれば、数値になるかどうかというのが評価です。あとは、よく観察し、その事実を記述するということが必要であります。あと、問題の解決が優先されます。当然、効率よく高い効果でというふうにしたいのですけれども、それは、一回何か形を出してきてから、もっといい解き方はないかというふうな、その直していく過程、整理ですね、そのプロセスであると。あとは、これが正しいかどうかというのは、プログラムを動かさないとわかりませんから、試して確認するという考え方ですね、営みが必要になります。

翻って、これを学校で教えなければならぬということになると、教師が教え子にとってのエキスパートたるべしとするのであれば、これはごまかしなく相応の経験は必要なのだと思います。要は、プログラムをやっていれば、それなりに会得するものはあるかもしれません。ただ、絶対プログラミングをやっていないとプログラミング思考が教えられる、または、何に当てはめられるということではありませんが、こういったプログラミング思考の経験を手っ取り早く得られるのが、たまたまプログラミングという環境であるということ、そういうふうを考えて、これから、では実際に現場でどういうふうを考えているのかとか、あとは、ほかの人たちはどういうふうに言っているのかとか、真っ当なプログラミング思考というものの確立に向けて、今後とも研究を進めてまいりたいと思います。

以上です。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

それでは、ただいまの報告について、フロアから御質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思

います。いらっしゃいますでしょうか。

ないようでしたら、3報告が終わってから、もう一度、質疑、感想をいただく機会も設けますので、第1報告はこれで終わらせていただきます。

○小泉氏 ありがとうございます。(拍手)

第2報告

○司会 続いて、第2報告は、田村龍一准教授による「まちラボのこれまでとこれから」について報告いたします。

では、お願いいたします。

○田村氏 お待たせいたしました、失礼いたしました。「まちラボのこれまでとこれから」という題名にてお話をさせていただきたいと思います。私は、本学の田村龍一と申します。ビジネス観光コースを担当しております。

本日お話しする内容というのは、まさに、これまでとこれからというところなのですが、もう少し、まちラボというのはもともと中央商店街に位置している本学のサテライト施設であります。もともと、中央市街地活性化というのを究極の目標として開設されて、本年3周年を迎えたというような施設であります。本日は、これに関して、実は、去年まで若原先生という方がこちらの室長だったのですけれども、ことしの4月から私が後を引き継ぎまして、まだ3カ月程度ですけれども、コミッティの先生方と一緒に運営をさせていただいております。

きょうお話しするのは、4月に私がこちらに着任してから、何を行って来て、今年度、とりあえずは、今年度の終了のところを目標として、これからどういうことを行っていこうかというところを常々考えてまいりましたので、それを皆様に御報告申し上げて、皆様からの御意見や御批判等を、もっとよいアイデアとかあったら、共有させていただきたく、拝聴させていただきたく思います。

これまでの取り組みとしまして、このまちラボの、大体、活動をどういう形で主にやってきたかというところ です。

基本的には、まず、使っていただくというところは非常に大事だと思いますので、使っていただくことで中央商店街に人もふえますので、市民の関心が高いようなものに関して何か企画等はできないか。プラス、今年度、メディア表現指導員もかわりましたので、そのメディア表現指導員の方の能力もしくは資質ですね、それが十分に発揮できて、なおさら市民の関心が高いようなもの、これは両方にとってよいことですので、こういうことをやっていこうというような大きな企画の方針がありました。

それで、平時の活動においては、大学では、たまに市民の皆様相手の公開講座というのが行われているわけなのですが、そこにも積極的に会場利用プラス広報的なところも行いまして、サテライト施設としてどんどん外部に発信していこうというようなことをやっております。

あと、中央商店街、人通りがあるときには、特に、このまちラボの前を通りかかってくるような人がいましたら積極的に声をかける、これは中央商店街に構えている以上、やはりちょっと経営的なマインドというのですか、そういうのは非常に必要だと思いますので、積極的にお声をかけさせていただくようなことをやっております。

一回来館されたら、来館者間、皆さん他人同士ですけれども、ある程度限定された空間ですから、来館者間で、皆さんでちょっと交流ができるぐらいの、そういう雰囲気ができるように、そういう心がけを行ってきたつもりであります。

あと、一回来館していただいた方は、もう一回、何度も足を運んでいただけるように、メルマガでイベント等がありましたらどんどん告知をしていくと。現時点で約50名の方が登録していただいております。

では、これまでどんなことをやってきたか。

基本に戻って、2014年の本学のCOC活動レポートというのがございます。こちらでまちラボのコンセプト的なところが図になってあるので、これをもとに簡単に御説明させていただきたいのですが、大

きく分けて、中央商店街というところを中心にした、いわゆるまちなか空間というところがあります。それ以外の、海外も含めたところ、これ、まちそと、大きく二つ分けて、この二つを取り持つ、このブリッジ、橋渡しをする存在として、まちラボというのがつくられたという経緯があるようです。

これに対して、4月から行っているものとしましては、内から、中から外へ関しては、フェイスブックでかなり頻繁に活動状況を外部に流すようにしています。あとは、近隣の地域の方々向けにプレスリリースなんていうことも熱心にやるようにさせていただいております。それとか、新しい商品やサービス、イベントとしましては、稚内友好協会様の御支援等もいただきまして、ネパールカルチャーデーなんていう大きなイベントを行ったりいたしました。

あと、まちの外側ですよ、市街地の外側から得られる情報をどういふふうにかこの中に取り込んでいくのか。私たちは、基本的には、そこに対しては、この稚内という立地特性も絡んで、インバウンド観光関連のイベントみたいなことをやってみてはどうかというようなスタンスで、こっち側ですよ、外から内向きへの矢印というのを考えております。

あと、どんなことが、こういう枠の中で流れるべきか。基本的には、お客さんがどういうニーズを持っているのかというのは、常日ごろからニーズを調査して、来館後の関心がどんなふうになっているのか、この辺もチェックしております。

我々の、中の、これから行われている取り組みというのを幾つか説明させていただきたいと思います。

一つは、本学のシュウ先生がやっていたらっしゃる中国語講座と言われているもので、日常的な中国語のよく使われる表現等を市民の皆さんと一緒に勉強する、映画等を用いて勉強していただくようなところの会場として使っていただいております。これはもう本当にシュウ先生の地道な活動が実りまして、大体ほとんど、シュウ先生のコアなファンの方々毎回皆勤賞で来られているというふうなところで、私たちは4月にここに来てからちょっと驚いて、すごいなと思ったのですけれども。

さらに、私たちとしましても、先ほど言いましたようにインバウンド観光的なところ、大学は、私も観光に関して研究をしていることもありますので、やはり観光的な側面というところで外側から内側への流れというのを把握していこうと。そんな折に、まちラボに電話とかで、よく、こういうことをやらないんですかなんていう市民からの問い合わせがあったのですけれども、その中で一番多かったのが、どうやら英語の学習だったのですよ。英語の学習か。ところが、いろいろ聞いてみると、市内ではいろいろな場所で英語の活動、英語の教育活動、サークルなんていうのが行われていたようです。ですから、我々としましては、どう差別化していくかなというところで、先ほどのインバウンド観光というところ、観光英語というところを考えていこうかと。

力点としましては、もちろん英語なわけなのですけれども、稚内の方々、非常に温かい方が多くて、どうやらおもてなしの気持ちを持っている方が非常に多いような印象を受けました。それで、もう、とりあえず英語なんかしゃべれなくていいから、おもてなしのこの気持ちを外国人に、稚内駅近辺の外国人に伝えて、彼らの役に立てれば、それがとてもいいのではないかと、そのおもてなしを前面に押し出した英語講座という、英会話講座ですね、超初心者を対象にした英語講座というのを開催させていただいております。

これに関しては、第1回、パイロットランみたいな形でやったのですけれども、ちょっと、スタッフの皆さんの手をはるかに上回る17名ほどいらしてですね、若干、教育効果というところで非常に大変な思いをしてしまいましたので、プラス、もっと講座を受けたいという方がいらしたので、第2クラスというのを開催することにいたしております。そろそろ行われる予定です。

ただ、ここで非常に、インバウンド的なおもてなしのイングリッシュということに賛同していただいた方が結構いらしたので、今度は、本学には留学生二十数名が毎日勉強しております、彼らに外国人の観光客のふりをしてですね、彼らとコミュニケーションをとる、より実践的なレベルの第2回というのを開かせていただきまして、ラメス君とバガバン君が参加してくれたのですが、非常に二人とも協力的で、非常にアカデミックな感じで、道先案内の英語を勉強してみましようみたいな取り組みというのがありました。参加者のリアクションも非常によかったというふう聞いております。

そのほか、レギュラープログラムとしまして、アメブロをつくる、これはどちらかというと、商店街の店主さんとかでホームページで情報発信したいというときに、ホームページなんか簡単につけれないよなという人向けに、簡単にそういう宣伝効果が期待できるアメブロというブログのシステムをどうやってつくったらいいですかというような、非常に手ほどきの講座をやらせていただきまして、プラス、パソコンのスキル面の要望も非常に高かったので、同じような形で、はじめてのエクセル、はじめてのワードという、すごく入門的なものを開催させていただいております。

こういう形で、市民の皆様の、日々の、特にIT的なところ及び国際的なところに関する補助的な企画、イベントなんていうのをやらせていただいている次第です。

大きなイベントとしましては、ネパールカルチャーデーというのがございまして、これでは、一般来館者数で、我々スタッフとか本学の人間を抜いて65名程度来ていただいて、かなり盛り上がったイベントだったというふうに記憶しております。11時から午後3時ぐらいまでいましたけれども、ポイント、ポイントでお客さんが入れかわって、音楽、踊り、クリケット解説、ネパール語講座、大学の研究とか勉強とは余り関係ないところではあるのですけれども、ネパールの文化を知っていただくものとして非常に好評を得たというような形であります。

逆に、低調に終わったイベントというのもあります。

一つは、3周年記念イベントというのがありました。これは、来場者数が残念ながら非常に低かったですね。さらに、母の日にメッセージを送ろうというイベント、こちらも申込者ゼロだったので中止いたしました。この辺を反省点として、これからどんなふうに活動していこうかなというところをこれから考えてみたいと思います。

それを考えるときに、我々が観察した、市民の皆さんの、もしくは来館者全体の活動パターンってどんなものなのかというのを、ちょっと観察に基づいているものですが、御説明いたしたいと思います。

基本的には、市民の皆さんがうちに来るといときには、かなり、何らかの問題意識を抱えていることが多いです。それがこの四つ、今回の御紹介させていただいた四つのトピック、このトピックをどれか一つを受講すると、さらに、こんなのあるんだ、あんなのあるんだということで、さらに関心が広がって、継続して講座等を受講されるという流れが非常に多いように思います。やっていくうちに、かなりよい設備がありますので、勉強などで使うお客さんとかも結構ふえてまいりました。

もう一つ、市外からの転入組というのが、やっぱりネットワーク、市内で暮らすためのネットワークをつくるために、熱心に市民の方と協働しているような光景も見られております。ポイントは、やっぱり市民は、まちラボを使うときには、何らかの具体的な自分なりの問題意識を抱えているというようなことのようにです。そして、まちラボに入ってくると、さらに、例えばパソコン講座を受講した人が英会話のほうに興味を示すとか、そういうふうに関心に広がりが見られていくというパターンが見られております。以上の動きを勘案しまして、これからのまちラボ、どういうふうにしたらいいかなというところを考えてまいりたいと思います。

まずは、今までの、この3カ月間の活動、短い期間でありますけれども、その時点でどんなことが期待されているのだろうかというところをちょっと考えてみたいと思うのですけれども、やはり市民のニーズにマッチしたプログラムというのは、どうやら受けますね。来館者数もいいし、反応もよろしいです。具体的には、パソコンのITスキルですね、それと英語に関すること。あと、正直、ネパールカルチャーデー、あんなにお客さんが、白夜祭の裏プログラムだったということもあつたのですけれども、さらに関連機関の方々も非常に、別格の、破格の待遇をいただいたというのもあるのですが、来ていただいて、非常に好奇心の目で、満足して帰っていただいたというのもあります。この辺は、どうやら市民の方々のアンテナに引っかかってくるトピックなのではないかというふうに思っております。

あと、もともと地域の活動とか地域の情報発信、こういうことに問題意識が高い社会人の人々というのが、まちラボに来て情報交換なり、何か新しい知見を発見する場所としても期待されているような、そういうような感触も受けました。こういうところは、今後も推進していきたいと思っております。

ただし、これらの市民の皆さんの持っているニーズ、そこにこだわり続けていくと、やがて興味は飽和していくことになりますので、やっぱり一つのポイントとしては、来館者の関心がどうやって広がっていくかということ、こういうところにも着目していく必要があるかと思えます。一回講座に出席すると、ある程度、好奇心が満たされますので、次は何があるかな、その次は何があるかなというところに応えられるような、継続的な刺激を与えられるような企画もしくは雰囲気づくりというのを今後も考えていきたいと思っております。

というわけで、これから、まちラボ、どんなふうにしていこうか。

今までの3カ月のスタッフの皆さんの御尽力から明らかになったところでいきますと、語学、異文化交流、パソコンの日常利用というところがかなり強いニーズがあるので、ここはとりあえずキープして、継続的に続けていこうかなと思っております。そして、留学生に参加していただいているおもてなしイングリッシュというところ、これも非常に好評ですので、やっていきたいと思えます。究極の我々のまちラボサイドの目標としましては、異文化に対する理解と親しみの気持ちというのを参加者の方に持っていて、それに対して、ホスピタリティですよね、という気持ちを、なるべくスムーズに伝えられるような、英語としてしゃべれなくてもいいのだけれども、とりあえずその気持ちが伝わって、何となく外国人の案内がうまくいくような、そういうようなレベルまで到達できるまで頑張っていこうかなというふうに思っております。おもてなしイングリッシュの講座の具体的な文例には、レストランを案内するというのもありますので、当然ながら、中央商店街のラーメンショップとか、そういうところも案内する文等を組み入れていこうと思っておりますので、中央商店街の消費活動の促進にも貢献できたらいいなと思っております。

以上が、これまでの3カ月間のまちラボを運営してきて、これは来年度までやったほうがいいかなという、短期的な目標であります。

そして、最後に、一応来年3月をゴール、目標とした場合に、やっぱりCOCの設立趣旨というところにちゃんとコミットしていく必要があると思えます。まだうまくできていない部分というのが少なからずあると思うので、それを最後の1年でアピール、最後というか、この1年でアピールしていこうかなと。

一つは、まちラボというのは、この本学の学生や留学生が実践をできる機会、自分の研究を実践する機会でも、実践の場所を提供するというような見方をさせていただきたいと思っております。特に日本人学生及び留学生ですね、大学で学んだことを中央商店街の中で試すというようなことをやっていただきたいと思っております。皆さん、その辺が、特に学生の皆さんに言いたいのですけれども、そういうのが余りちょっとうまく、どうやったらいいかわからないと思ったら、どんどん私たちに相談をしていただきたいと思えます。企画は幾らでもやらせていただきます。みんなと相談して、幾らでもやらせていただきたいと思えます。

二つ目が、アカデミックなまちラボというようなところも、現時点はちょっと、その側面が少し少ないような気がいたしますので、公開講座を積極的に開いていただくほか、学生、教員の研究成果というのをちゃんと通行人の方に流して、その研究内容というのが一般市民の方にどうやってアピールできていくかということ、見せ方の工夫ですね、こういうところをこれから頑張っていきたい。これは、学生、教員、皆様にもちょっと考えていただきたいことかなと思うのですけれども、御自身の研究と市民の意識の中に距離があるときに、見せ方を工夫するという作業が必要になるのではないかと思っております。

最後に、ネットワークハブとして、人的交流というのを私たちはかなり重視しています。館内で、どんな人的交流ができてネットワークがつけられるかということ、これをすごく重視しております。この、人々の結びつきというのは、もっと長い期間継続して続いていくようなものであって、非常に人的なつながりというのは大事なものと考えております。

以上を組み合わせると中央商店街の活動に貢献していくということが、最終目標となっております。

では、簡単ではございますが、以上で発表を終わらせていただきます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

では、ただいまの報告について、フロアから御質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思いま

す。いらっしゃいますでしょうか。

ないようでしたら、次の報告が終わってからもう一度、質疑、感想をいただく機会も設けますので、第2報告はこれで終わらせていただきます。（拍手）

第3報告

○司会 それでは、口頭報告最後となります。第3報告は、安藤友晴教授とほか教員、学生4名による『COC事業「地域志向科目」の実践』について報告いたします。

では、お願いいたします。

○安藤氏 皆さん、こんにちは。稚内北星学園大学の安藤と申します。本日は、「COC事業「地域志向科目」の実践～『地域学2』を事例に～」というタイトルで発表させていただきたいと思います。発表者は、私、安藤、そして、横田、石橋、そして学生のイトウ君とイシオ君の5名で発表させていただきたいと思います。

初めに、のっけから申しわけございませんが、おわびがございます。本日、お手元に資料が、この関係の資料が2部ございます。うち、横に穴があいているほうの資料なのですが、そこでイシオ君のお名前を間違えてしまいました、イシオミサキさんの「美しい」という字がちょっとレジユメのほうに抜けております。大変申しわけありませんでした。

では、初めに私のほうから概要の御報告をさせていただきたいと思います。

COC事業が始まってから、地域志向科目というのを大学で進めてきております。本日は、そのうちの地域学2という授業の実践について御報告をするという内容です。

まず、この地域志向科目とは何かということですが、これも言い方がさまざまあるかとは思いますが、ここではちょっと簡単に、道北宗谷地域「で」学ぶ科目であると。もう一つは、道北宗谷地域「を」学ぶ科目であると。この二つの御説明をしておきたいと思います。

道北宗谷地域「で」学ぶ科目というのは、道北宗谷地域を舞台にした形で何らかの学習を学生がしていくと。道北宗谷地域「を」学ぶというのは、学ぶ対象自体がこの地域になるということです。本学は情報メディア学部ということで、情報とかメディアの学習ということを中心とする学習内容でありますけれども、御承知のように、地域で学ぶということを大変重視しております。この地域志向科目というのを多数用意しておりますけれども、概ね、この「で」と「を」ということは、両方とも満たしている科目は多くありますが、科目によっては、そのどちらかにするというのもございます。今回の地域学2というのは、全学生が必修となっている、必ず学ぶ科目となっている地域志向科目となっております。授業名が地域学2ということですので、地域学1というものもあるのですが、これは1年生でやります。今回は、2年生の地域学2についての御報告ということになります。

授業の担当者ですが、私、安藤、そして、前市長の横田耕一先生を、私ども、客員教授としてお招きしておりますので、その横田先生。そして、2017年度以降は石橋先生。そして、2016年のときは本学の講師の黒木さんが担当してくださいました。単に授業の形式で、教員の話が学生が一方的に聞くというのは、もちろんそれもあのですが、それだけではなくて、アクティブラーニングと呼ばれる、学生が実際にいろいろなところを訪問したり、グループワークで何かを仕上げていくとか、そういった演習を非常に強く重視している科目でもございます。

これまでどんな内容をやったのかということをお説明いたします。

2016年度と2017年度の2年間につきましては、基本的には道北宗谷地域の1次産業のということを中心としたテーマとして扱いました。2016年度は、酪農業、林業、水産業についてみんな勉強しようという形だったのですが、これはちょっと、やや詰め込み過ぎで、大変でしたので、昨年、2017年度は酪農業について絞りました。具体的な目的といたしましては、学生がまず地域の1次産業について理解を深めるという、こういう基本的な目標を上げております。ただ、単に1次産業について知るだけではなくて、その1次産業を知った上で、その知ったことを、例えば今後のまちづくり、地域振興、そうしたこ

とに役に立てないだろうか、あるいは、そういう役に立てるような発想を学生にどんどん身につけてほしいと、こういう思いから授業の設計を行っております。

具体的に授業を行った際の成果物といたしましては、この地域の魅力を記した地域資源カード、後ほど御紹介いたします、であるとか、旅行客が、このあたりを旅行してくる方ですね、地域の1次産業に触れるようなプロモーションツアーの設計など、こうしたようなことを授業の最終課題として学生に作成していただくというようなことをやってきております。具体的な内容は、お手元の資料の穴があいていないように、結構、いろいろな講師の方を外からお招きしたり、あるいは、授業の内容はどのようなものかというのをちょっと記しておりますので、ごらんいただければと思います。

2018年度、現在進行中の内容につきましては、稚内の近現代とブックレット作成ということで、ちょっと内容を少し変えています。基本的に、このあたりの地域ということをお今の大学生の世代がよく知っているかということ、学んできている機会もそれほど多くございません。ですので、この地域の歴史ということ、まず学生がある程度理解していただいた上で、今後の地域活動における、基礎となる知識を身につけてほしいというのが目的です。今回の授業の場合は、特に宗教の役割ということに着目をいたしまして、稚内から、いろいろな方が移住してきてこのまちが成立してきているわけですが、そのときの移住の形と宗教との役割、関係性、こういうものを明らかにしつつ、稚内の昔を理解したいということでございます。そのために、これは現在進行中なのですが、これから学生が稚内のお寺、あるいは神社、こちらのほうを御訪問させていただきまして、いろいろ取材して、その内容をブックレットにまとめていきたいというふうに考えております。

この地域学2という科目につきましては、こうした内容でこれまで行ってきております。

この後、地域学2のねらい、どのような思いから地域学2という授業を構成しているのかということをお横田先生にお話をさせていただきます。

そして、具体的に地域学2でどのような学習をしたのかというようなことを、石橋先生、そして、2名の学生の皆さんにお話をさせていただくということで話を進めてまいりたいと思います。

では、横田先生、お願いいたします。

○横田氏 どうも皆さんこんにちは。まず、御出席いただいたことを心からお礼申し上げます。

私が出る幕でもないですけれども、安藤さんと石橋さんが配慮していただいて、顔見せぐらいしろ、ということでございますので、簡単に、そのねらいといいますか、話をしたいと思うのですが、私も、市長時代に稚内学というのを提唱いたしました。今も教育委員会で稚内学をやっていただいていますし、そういったことを実施する過程で、観光ボランティアの皆さん方が組織をして、今、一生懸命学んでいただいているというのが現状でございます。まだまだやることはたくさんあるのだと思いますけれども、少なくとも観光ボランティアをやっていらっしゃる方々の稚内に対する認識、地元のか、私たち自身が生まれ育った地域への認識といいますか、その度合いは非常に高いなということをお折に触れて感じています。ボランティアの方々には、自分が思った、あるいは感じたことを、訪れていただいたお客様にどう伝えるかということで、非常に深く学んでいただいておりますし、それは、とりもなおさず、この地に対する、ある意味、愛着を持って接することなのだろうというふうに思うのです。そんなことで、市を挙げてと言ったらちょっと語弊があるかもしれませんが、大げさかもしれませんが、稚内学に取り組んでいただいている。それを、本学が一昨年、この地域学2という形で授業として取り組んだということで、とても、私としてはありがたいなと思いますし、何か役割を果たすことができたらいいなということで、一緒に携わらせていただいております。

私は、物を教えるというよりも、どちらかというと、お手元に配付させていただいた資料にもありますが、たくさんの講師の方を外から来ていただいておりますけれども、そういった方々をお呼ぶ際のコーディネートといいますか、そんな役割を主にさせていただいているわけでありまして、しかし、その中で、学生の皆さんがどんな状況にあるのかということも少しずつわかってまいりました。少なくとも、そう多くはない学生数でありますけれども、学生数の中でも、多くはやっぱり、稚内市に残りたいという

人たちが多くあります。そういった学生諸君に、やっぱりここにこれからも住み続けていただく以上は、自分たちの生まれ育ったこのまちについてもっともっといろいろなことを知ってほしいし、また、知ることが、住み続けようという愛着心につながればいいなというふうに思って、この地域学2を、今までもやってきましたし、これからもやり続けていくことができたらいいなと、そのように思っています。

1回目、2回目と、どちらかという、稚内市の生活というか経済を支えた1次産業について学んでもらいました。1回目は総花的なわけですが、1次産業のですね、水産業、それから酪農業、それから林業と、こういうようなことで、それぞれを総花的に学んだのですけれども、2回目は、今、安藤さんも言いましたように、ちょっとこれでは余りにも課題が大き過ぎるといいますか、対象が大き過ぎることから、酪農に絞って学ぶ機会をつくりました。この後、学生の皆さんにお話をさせていただきますけれども、いろいろな、稚内、あるいは北海道もそうですけれども、1次産業はどちらかという主力ですよ。そんな中で、それでも物足りないということから、いろいろな形で企業の誘致だとかですね、そういうことが各自自治体の大きな目標になったりして、それに予算を注ぎ込んで、例えば工業団地なんかを造成してきたところでもありますけれども、なかなかそれがうまくいかないというのが現実です。その中で、今非常に厳しい側面はありますけれども、私どもの1次産業、もっともって活力を持てるようなものに、我々外部にいる者もしていくような力を出していくことが必要だろうというふうに思って、その1次産業について学ぶ機会をつくりました。

ここで、実は我々もわからなかったことですが、昨年なんかは、酪農業というのは実は非常に元気がいいぞということがわかってまいりました。それも、さまざまな手だてをとったからであります。例えば、今まで1軒の農家が全てをやっていたわけですが、最近は分業が進んできています。例えば、PMRとって、草刈りだとかですね、そんなものについては集団化して、それをそこでやって、あとは農家に配給をするというようなことがやるようになりました。このことで、例えば農家の自由な時間がふえてくるかですね、あるいは、牛を育てる、まさに育てるそのものに力をかける時間ができるようになったとか、そんなような状況に今来ているわけですね。それでも、残念ながら離農は減らないという状況にあります。でも、残った1軒1軒は非常に今力を持って、新しい経営環境にしていこうという努力が進められています。お金で言うと2億円以上のお金がかかるのですけれども、牛舎を新しくするとかですね、そういうことによって、今度は、また新しい、農業に、何ていうのですかね、かかわっていこうとする時間がまた新しく生まれるというような好循環を生むようになってくると。そういうことで、非常にいい環境に、農業が、酪農業が生まれ変わりつつあるような気がいたします。ただ、離農がふえるということは、それだけ後継者がいないということでもありますから、授業を受けてくださった学生の中で、農業を志してくれる方がいればいいなと思いますけれども、なかなかそうはいきませんので、それをバックアップするような、そんな役割を地元でやっていただくようなことができれば、これはすごくいいのではないかなというふうなふうに思っております。

いずれにしても、地域学というのは、先ほど、地域で学ぶ、あるいは地域を学ぶという表現をされましたけれども、まさに、今いる自分たちが住んでいるまちを本当によくしていこうと、そして、何よりも住みやすくしていこうということを標榜していく、そんな、学問と言えるのかどうかわかりませんが、領域だというふうに思っています。

今までは、話を聞くとかそういうことが多くて、グループワークと言いながら、なかなか教室の外には出ませんでした、出ることができませんでした。そこで、これからは、大学としてはやはり、フィールドワークをもう少し真剣に考えていく時期に来ているなというふうに思っています。これは、教育委員会の稚内学もそういった形で取り組んでいくことがこれから必要なのではないかとこのことを教育委員会の皆さんと話していますが、そういうことで深掘りをしていくということ、大学のこの講座として、これから皆さんに発信できればいいなと思っております。

どうか、稚内学への参加もぜひ皆さん方をお願いしたいと思いますし、また、この大学の地域学と稚内学が、先日も蝦夷地開拓と宗教という、北海道大学の先生をお招きして講義を連携して行いました。そんな

なようなこともしながら、地元で軸足をきちんと置いていくような多くの市民の方々が輩出するように、大学と地域と挙げて頑張っていくことができればいいなど、それにまさること、まさに地域学はないなど思っていますので、これからも御協力をよろしくお願ひいたしたいと思ひます。

○石橋氏 ここからはアクティブラーニングについてということだったので、僕のほうから話すよりも、学生のほうに話してもら方がよいと思ひますので、まず、伊藤君お願ひします。

○伊藤氏 こんにちは。4年生の伊藤良平と申します。私は、2016年度の地域学2についてお話をさせていただきます。

まず、私が発表する部分の目次となっています。

1年の授業の流れで、最初に事前学習をします。そして、各産業の方々の講話を聞き、そしてフィールドワークをして、最後にまとめという形で1年間進んできました。

事前学習ということで、最初に、産業の基礎情報や各情報のSWOT分析をします。SWOT分析というのは、強み、弱み、機会、脅威の頭文字を取ってSWOT分析と呼びます。農業のSWOT分析が、自分で考えて書くものなので、僕はこういうふうなSWOT分析になりました。これが農業です。

次に、漁業についてのSWOT分析です。

これが、僕が、各項に当たる強みだと思ったので書きました。

そして、フィールドワークということで、実際に農場や森林へ行き、どんな仕事をしているのかということを書き入れました。これが、実際の様子になります。

これ、農業なので、実際に飼料をつくっているところの映像です。

これでは、実際にハーベスターという機械を使って飼料を筒状でつくっています。

このようにして実際にフィールドワークをして、実際にはどういう仕事をしているのかということを見ました。

そして、フィールドワークが終わった後に、こういうような様式を用いて地域資源カードを書きます。農業についての地域資源カードは、私はこういうように置きかえたやつを、牛が稚内の地域資源ではないかということを書きました。

次に、林業ということで、さっき、木を伐採したり切っていた、長さを調節して切っていた機械というのも稚内産業ではないかということを書きました。

次に、漁業。漁業では、実際にこれ、しているのですが、特許を取られているので、これも稚内の地域資源になるだろうということ、こういうふうにも書きました。

まとめとして、最終課題として、グループになって地域学2で学んだことを踏まえて、各産業についてまとめて稚内の観光ルートをつくるということ、まず設定があります。設定が、12時から稚内空港を出発し、翌日の13時に稚内空港へ到着する、観光ルートは自由という設定で、私は、これらのようなルートを組みました。

あと、私は、フィールドワークをやったり、実際に学んだ稚内のいいところを観光客に知ってもらいたいということ、こういうようなルートを組みました。

私の発表はこれで終わりますが、最後に、こういうふうにも実際にルートを組んだことによって、22年間稚内に住んできて、実はわからなかった稚内の資源だったり、いいところというのが見られて、とても勉強になりました。

次に、2017年度の発表を石尾君お願ひします。

○石尾氏 こんにちは。3年の石尾美岬です、よろしくお願ひします。

私は、2017年度の地域学2の授業について発表していきたいと思ひます。

目次なのですが、地域学2の活動内容とプロモーションツアーについてちょっと御説明したいと思っております。

地域学2の活動内容なのですが、先ほどイトウさんのほうからありましたSWOT分析であったり地域資源カードであったり、私も作成したのですが、最後にありますこのプロモーションツアー

の作成、発表というのが一番大きな活動内容となっております。

上から順を追っていきますと、宗谷管内の酪農について学ぶことが一つと、その学んだことについてグループワークを通して酪農について話し合うということがありました。三つ目なのですが、この地域学2の授業自体が、日本人学生だけではなくて留学生も交えての学習だったため、私のグループにネパール人留学生がいたので、その留学生とともにグループワークもしました。その留学生の意見なども聞きながら、ネパールの酪農事情についての意見交換もグループワークの中で行いました。最後に、プロモーションツアーの案の作成と発表を行ったという形になっています。



プロモーションツアーの内容なのですが、酪農という大きなくくりと観光ということのかかわりを知るということをもっと考えていきました。それについて、どのような場所を実際に案内するかであったり、観光に来てくれた人に対して知ってほしい場所を私たち学生が考えるということ、二つ柱としてプロモーションツアーを作成しました。

これがツアーの日程表になります。これを、私のグループ含めて五、六グループぐらいで、それぞれツアーの日程を立てたという形になります。先ほどもイトウさんのように、列になっているわけではなくて、エクセルのエクセルトというのを使って、このような日程表を作成しました。

地域学2の感想なのですが、この講義を受けないと、私自身、稚内出身ではないので知ることができなかったなということが一つ大きくあります。私の将来の目標というか、将来の夢が学校の教員なので、実際、直接は関係ないのですが、それぞれの学校教育の現場で自分が教える立場に立ったときに、このような地域学2の発表という経験を生かしていきたいなと思っております。

また、先ほどネパール人留学生のお話もあったのですが、異文化コミュニケーションが一つ大きかったのではないかなと思いました。なかなかふだん、授業等で話すことがない留学生と積極的に交流して、ネパールの酪農の事情も知ることができたので、連携できたのではないかなと思えます。

感想は以上です。

では、石橋先生に返します。

○石橋氏 とうように、過去2年間はやっておりまして、ただ、過去2年間はどうしても見学というベースだったので、ことしに関しては、ちょっと見学ではなくて、実際にみずから今度取材をするというふうに、もうワンアクション加えた内容で地域学2を展開していきます。

ということで、これで地域学2の発表を終わります。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

それでは、フロアから御質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思えます。いらっしゃいますか。

ないようでしたら、第3報告はこれで終わらせていただきます。（拍手）

本日予定しておりました口頭報告3件を終えました。何か聞き逃したことでどうか、コメントとかありましたら、ぜひお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

それでは、ぜひプログラムに入れておりますアンケート用紙に御記入をいただければ幸いです。

特にないようでしたら、ポスター報告に移りますので、口頭発表はこれにて終了とさせていただきます。最後に、本学COC事業推進責任者である佐賀孝博副学長より閉会の御挨拶がございます。

お願いいたします。

○佐賀副学長 こんにちは。COCの事業推進責任者をしております副学長の佐賀と申します。本日はお忙しい中、口頭発表3件の御聴講いただきましてまことにありがとうございます。

本日に関しましては、研究の分野、それと地域貢献の分野、それと学生の教育という形の三つの報告がありました。研究のほうについては、この研究に限らず、得られた知見というのは、随時、地域のほうにも還元していきたいというふうに思っておりますけれども、今回の件に関しては、ちょっと関連して私ごとなのですが、本学の公開講座でもあるのですが、北海道150年ということで、今、道のほうでいろいろな事業をやっておりますけれども、その中で、子ども未来・夢キャンパス事業というのがありまして、いろいろな、道外の、全部ではないですけれども、各大学であるとか企業が、子どもたち向けの講座を開催しております。7月28日に、本学のほうでは私のほうで、プログラミング、まさにきょうのプログラミング的思考ということで、子どもたちにそういったことを体験してもらおうという講義も行う予定ですので、もしお知り合いの方がいらっしゃいましたら いただければと思います。

そのほかにも、地域のほうで、まちラボのほうでは、特にこちら、メディア表現指導員の方もかわりまして、よりできることが一層広がったということもありますので、今後ともますますさまざまな講座をやっていきたいと思っております。

我々も、広報がなかなか行き届かない点もあるかと思うのですが、もしも新聞あるいは、広報わからないとかで、そういった活動を見かけましたら、何か皆さんのお知り合いとお話になるときの話題の一つにでもしていただいて、どんどん入場者がふえることを期待しておりますので、御協力よろしくをお願いいたします。

また、教育の分野につきましても、地域学2で今回発表しましたけれども、これに限らず、学生をどんどん成長させましようというのがCOC事業の大きな目的の一つでもありますので、ぜひそういった有益な学生を地域に輩出していきたいというふうに考えております。

また、この後のポスター発表のほうでは、将来を見据えて稚内市のまちづくりということで、健康とまちづくり、あるいは生涯学習と関連した発表があると思っておりますので、お時間がありましたらぜひ教員のほうとディスカッションしていただければというふうに思っております。

先ほど安藤のほうからもありましたけれども、地域で学ばせていただくという活動が、まずこのCOC事業の中の大きな目的でありまして、その中で得られた、先ほども言いました知見であるとか人材とかいうのを、地域に恩返しという意味で還元するということになっておりますので、引き続き皆さんの御指導等をよろしくお願いいたします。

今後とも、活動のほうも御支援いただければと思います。

本日はどうもありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

本学は、これからも地域をフィールドにして研究、教育活動を行ってまいりますし、大学の取り組みを通じて地域に貢献していきたいと考えています。地域の皆様の御支援や御協力をいただければと考えております。よろしくお願いいたします。

この後は、ポスター報告として自由解散とさせていただきます。お帰りの際、アンケート用紙の提出に御協力ください。

本日はありがとうございました。（拍手）

2. ポスター報告(報告資料)

ポスター発表 1

○ 報告者

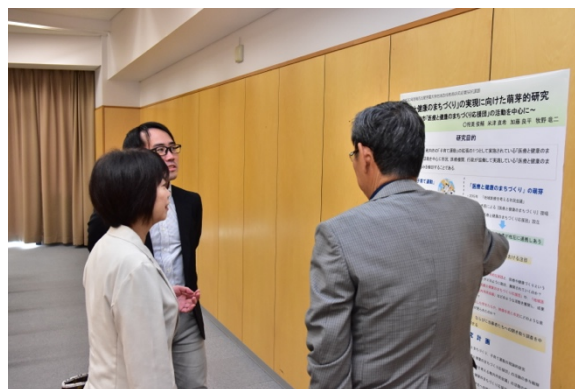
侘美 俊輔(情報メディア学部 准教授)
米津 直希(情報メディア学部 准教授)
加藤 良平(情報メディア学部 教授)
牧野 竜二(情報メディア学部 非常勤講師)

○ 報告題名

「医療と健康のまちづくり」の実現に向けた萌芽的研究
～稚内市「医療と健康のまちづくり応援団」の活動を中心に～

○ 報告内容要旨

稚内市では、2017年8月に「医療と健康のまちづくり応援団」が結成され、11月には、「行動計画」が制定された。本研究プロジェクトの目的は、稚内市の「子育て運動」の拡張の1つとして実施されている「医療と健康のまちづくり応援団」の活動を中心に 市民、医療機関、行政が協働して実践している「医療と健康のまちづくり」の取り組みを検討することである。本日の発表は、本研究プロジェクトの概要を提示し、今後の「医療と健康とまちづくり」の方向性について報告する。



ポスター発表 2

○ 報告者

浅海 弘保(情報メディア学部 教授)
ゴータム ビスヌ プラサド(情報メディア学部 教授)
安藤 友晴(情報メディア学部 教授)
佐賀 孝博(情報メディア学部 教授)
石橋 豊之(情報メディア学部 助教)

○ 報告題名

次世代 e-Learning システムによる社会人学生への協働学習モデル

○ 報告内容要旨

次世代 e-Learning システムによる社会人学生への協働学習モデルを用いて、学習成果に影響を与える様々な要因のメタ分析によって教育効果の可視化を行い、自己調整学習者の育成のためのコースに最適なコース設計を探る。

「医療と健康のまちづくり」の実現に向けた萌芽的研究

～稚内市「医療と健康のまちづくり応援団」の活動を中心に～

○ 佐美 俊輔 米津 直希, 加藤 良平, 牧野 竜二

研究目的

本研究の目的は、稚内市の「子育て運動」の拡張の1つとして実施されている「医療と健康のまちづくり応援団」の活動を中心に市民、医療機関、行政が協働して実践している「医療と健康のまちづくり」の取り組みを検討することである。

稚内市の「子育て運動」

- ・1978年 「非行問題懇談会」
- ・1981年 「稚内市子育て提言」
- ・1986年 「子育て平和都市宣言」
- ・2009年 新しい「稚内の子育て提言」

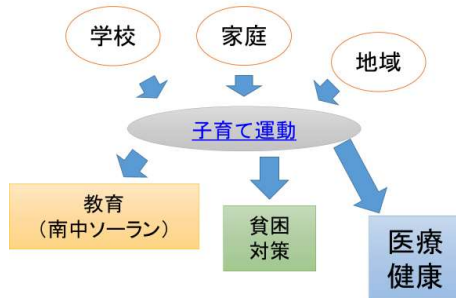


学校や教育団体を中心に、市民、町内会など重層的な組織形態で実施され、誕生から40年あまりが経過

稚内市子どもの貧困問題プロジェクト

- ・若原幸範が中心
→ 『わからない子ども・若者2015』
- ・プロジェクトの成果
 1. 幼保小中高大の学校間連携が整ったこと
 2. 学校間連携と教育、医療、福祉の連携
 3. 住民団体との連携の進展
⇒ 地域食堂“ふらっと”
子育てネット“わかかホーム”

稚内市における 子育て・貧困・医療・健康の関係性



「医療と健康のまちづくり」の萌芽

- ・2015年 「地域医療を考える市民会議」
- ・2016年 市長による『医療と健康のまちづくり』提唱
- ・2017年 「医療と健康のまちづくり応援団」設立



市民、病院、行政の3者が相互に連携しあう



本学「映像授業」における注目

問題意識

- ① 子育て運動などの教育的な実践と、医療や健康づくりという医療的な実践とがどのように融合、展開されていくのか？
- ② 市民組織の「医療と健康のまちづくり応援団」や、「地域医療を考える稚内市民会議」はどのような活動を展開し、成果を残すのか？
- ③ 映像を作成した学生たちや、映像を見た市民にどのような意識の変容が見られたのか？

参与観察、ならびに当事者たちへの聞き取り調査を中心に考察する

研究計画

- ① 医療とまちづくり、子育て運動の理論的研究
- ② 「医療と健康のまちづくり応援団」の活動の参与観察
- ③ 「地域医療を考える稚内市民会議」の活動の参与観察
- ④ 「医療と健康のまちづくり応援団」への聞き取り調査
- ⑤ 映像制作学生への調査とその反響の検討

次世代 e-Learning システムによる

社会人学生への協働学習モデル

研究構成員（代表者） 浅海 弘保 / ビスヌ プラサド ゴータム / 佐賀 孝博 / 安藤 友晴 / 石橋 豊之

概要

次世代 e-Learning システムによる社会人学生への協働学習モデルを提案し、協働学習を支える学習システムの構築を行う。学習成果に影響を与える様々な要因のメタ分析によって教育効果の可視化を行い、自己調整学習者*の育成のためのコースに最適なコース設計を探る。

*自己調整学習者

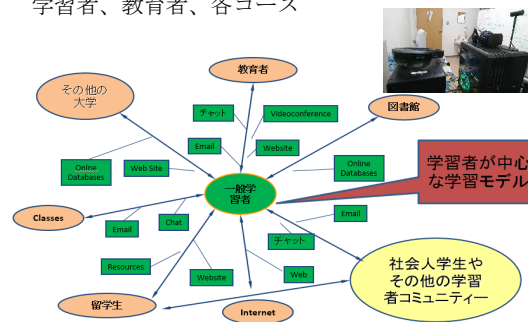
自ら新しい知識を獲得、保持、検索できる、意図的、自律的、自己主導的な学習者のこと。すなわち、自らを指導し、教育する学習者のあり方を指している。職業経験から深い知識や技術、能力を獲得してきた社会人は既に高い自己調整学習スキルがあるといえる。

目的

本研究では、現在の学習管理ツールが抱える問題を解決するため従来の学習管理システムである Moodle と自己調整学習者にとって重要なメタ認知と学習の振り返りをサポートする ICT ツールを融合したシステムを構築し、学力に影響を与える要因の効果を検定し、その可視化を行って教育内容にあった方法の選択の一助とすることを目的とする。さらに、学習者の興味を維持するため、最新の VR テクノロジーに対応したモジュール開発を行い、次世代教育システムの構築とそれを応用した協同学習モデルを提案が本研究の目的である。本システムは、特に稚内や宗谷地域の社会人をターゲットとし、従来から利用されて来た ICT の分野と VR/AR/MR を融合し、本地域で展開される教育効果の向上を目指す。なお、本研究はシステム構築を主眼とし、本システムを活用して行う教育の学力への影響の定量的評価については、平成 30 年度採択課題において継続して研究を行っている。

システム構成

- 学習管理システム-MOODLE (オープンソース)
- e-portfolio-Mahara (オープンソース)
- VR コンテンツ作成 PC (GPU)
- AR/MR デバイス Microsoft Hololenz (科研費)
- 学習者使用端末 PC, スマートフォン
- 学習者、教育者、各コース



学習者の自己評価方法

本システムを利用して、学習者に自身の学習と学習における活動に関する内省的振り返りを行ってもらい、学習者自身に評価を e-portfolio に集積していく。コースで出された課題に対するレポートとは別に、振り返りから自己分析をメタレポートとして提出してもらおう。例：数学の問題を通常の課題とし、問題を解く能力についての自信を評価してもらい、解いた後にその自信について再評価をするメタ課題を同時に提示する。

結論と今後の展望

本研究では、VR を組み込んだ次世代 e-Learning システムを構築し、自己調整学習能力の高い社会人学生と一般学生の協働学習モデルを利用した教育が実践可能となった。さらに e-Portfolio のシステムを融合し、学習能力に影響を与える要因についてその効果の測定と可視化が可能となった。実際の教育効果の評価については、今後の課題として研究を継続し、科目の特性、教授方法、学習者の意欲などの要素についてそれぞれ t 検定を行い、教育効果の視覚化により、教育者、学習者双方のメタ認知度を高め、最終的にクラスに最適なコース設計の一助とする。

2. アンケート集計結果

<調査の概要>

実施年月日：平成 30 年 6 月 26 日

出席者数：50 名

調査回収数 31 枚(出席者数に対する回収数の割合 62%)

<凡例>

- 1) 当該設問に対する回答数を「n=」で表記した。
- 2) 自由記述については、回答者の意図を損なわぬよう、原則として原文の形で取りまとめた。

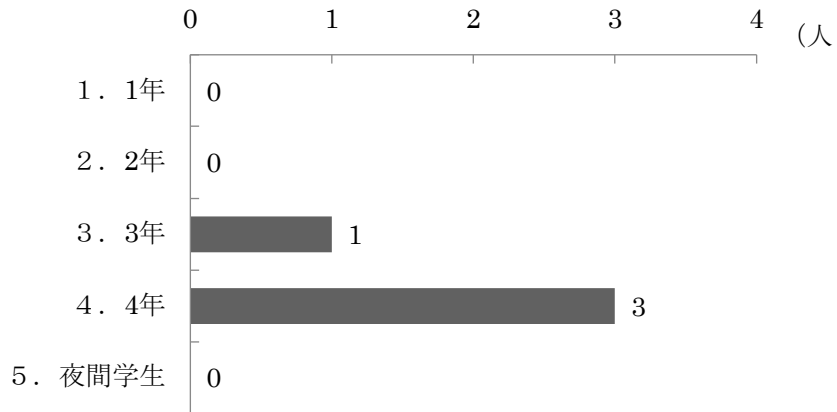
<結果の概略>

当日参加された 50 名の方のうち 31 名の方より回答を得た。

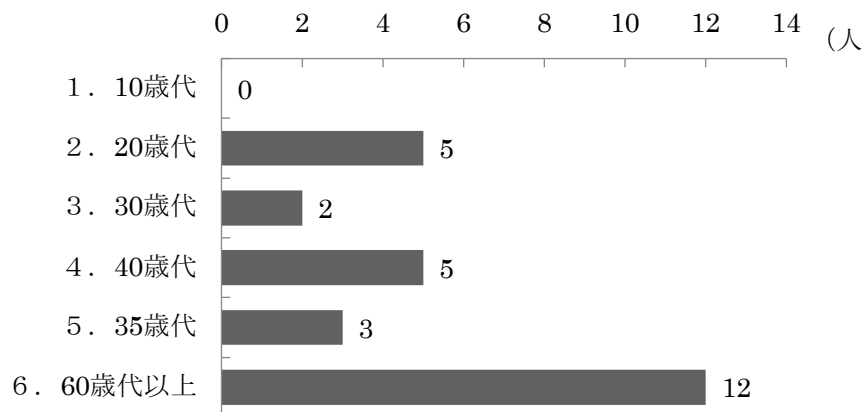
「報告会に来てよかったと思いますか。」との質問に対して「よかった」が 19 件であり全体の 6 割を占めた。また、「良かった」と回答いただいた方の自由記述には、「報告内容が楽しかった。今後もしできる限り足を運んでみたいと思った。」などの意見をいただいた。

(1) はじめにあなたの学年 (学生のみ回答)、世代、所属をお聞きます。(各1つに○)

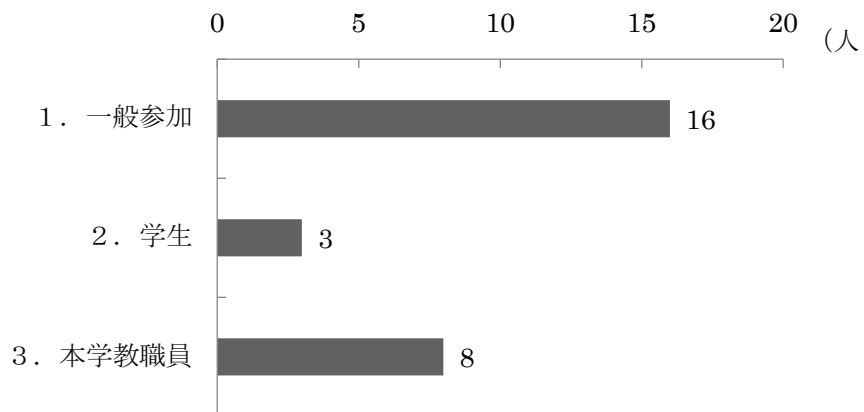
① 学年 (学生のみ回答) n=4



② 世代 n=27

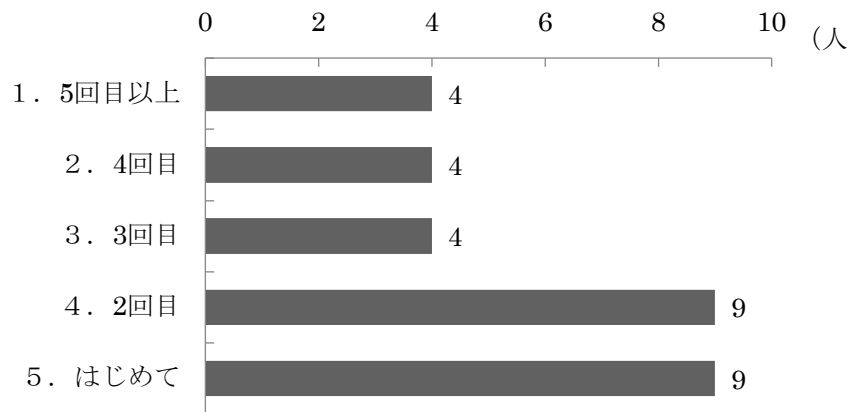


③ 所属 n=27



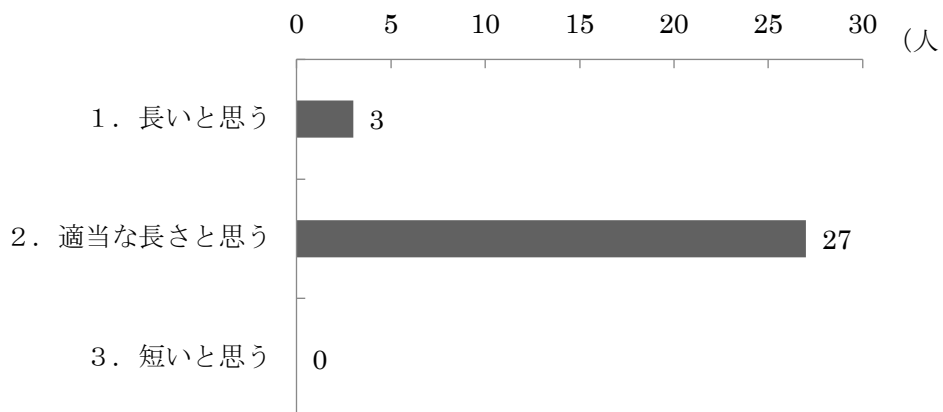
(2) これまで、本学では地域活動報告会5回、シンポジウム2回を開催しました。何回目のご出席かお聞きします。(1つに○)

n=30

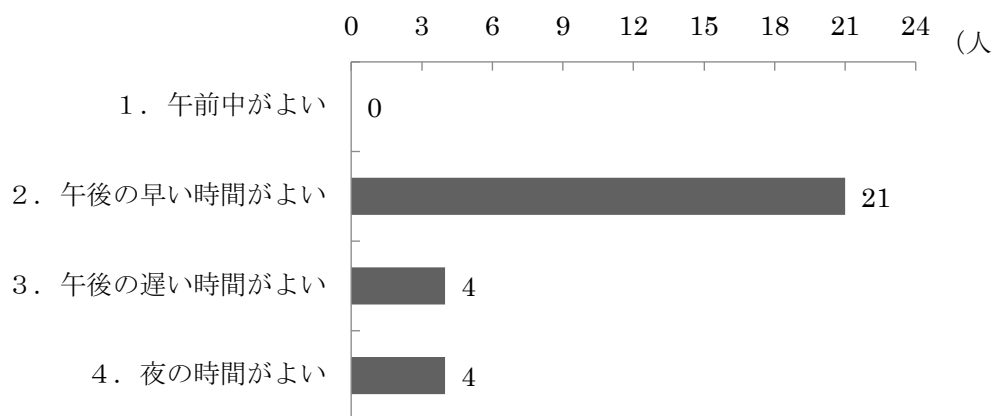


(3) 地域活動報告会の長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つに○)

① 地域活動報告会の長さ n=30

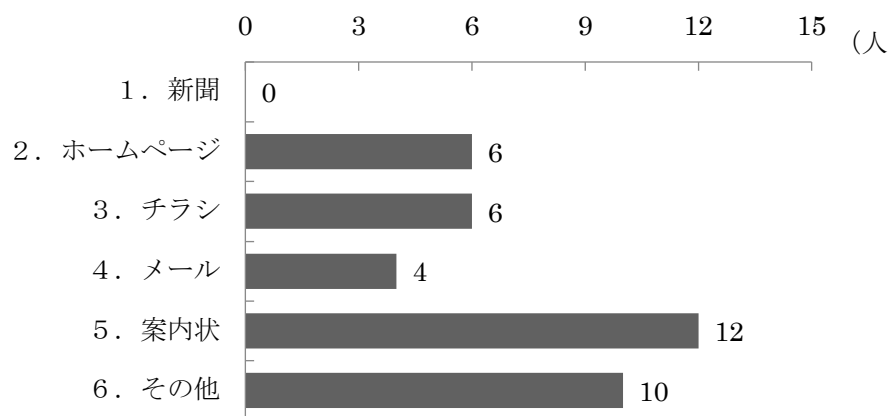


② 地域活動報告会の開催時間 n=29



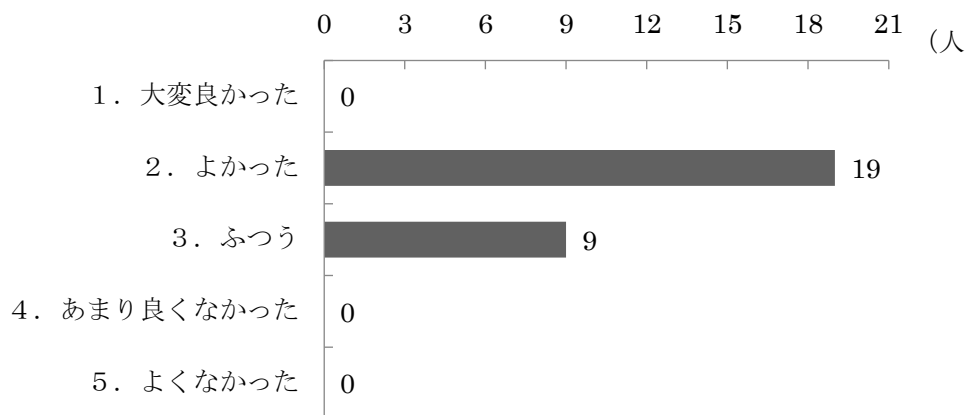
(4) 今日の地域活動報告会を何で知りましたか。(複数回答可)

n=38



(5) 地域活動報告会に来てよかったと思いますか(1つに○)

n=34



「2.良かった」を選択した理由(自由記述)

報告内容が楽しかった。今後もできる限り足を運んでみたいと思った。(幼稚園教諭)

学生の真剣さが新鮮であった(無回答)

がんばってる感が伝わりました(稚内観光協会専務理事)

スクリーンが暗くて見えない(無回答)

他の先生の活動を知ることができました(無回答)

まちラボの取り組みを知ることが出来た(学生)

大学が頑張っていることが改めてわかった(無回答)

地域産業事情が理解できた(無職)

「3.ふつう」を選択した理由(自由記述)

大学のこれからが知れたことです(学生)

(6) 今後、このような地域活動報告会や講演会、シンポジウムで取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

地域資源カードの活用に特化した報告会(一般参加)

自分の住んでる街を良く広く知ることが出来るような講座(無回答)

ゼミでの活動(無回答)

マスフェア等数学教室と稚内市の取り組み(学生)

(7) さいごに、各報告等についてご感想や激励のメッセージをお聞かせください。

報告①

「地域活動」しての話がないので困った。(本学教職員)

難しくよくわかりませんでした。「しらみつぶし」という言葉が今も使われていることが面白かった。(一般)

思考方法について考えられました(一般)

何となくプログラミング思考について少し理解できた(学生)

プログラミングの計算問題についての思考がわかった(学生)

関心を持ってる話題ですが若干難しかった。時間をかけてもう少しじっくり聞きたい内容であった(一般)

報告②

商店街の店主の方たちの「まちらぼ」に対する意見や「まちらぼ」の利用の希望を聞いてみたい。(一般)

経営的なマインドとビジネス観光のお話を聞きたいと思いました(一般)

これからどまちらぼを活用していくかが大事だと思った(学生)

まちラボの活動が知ることができた(学生)

まちラボの盛況を祈念しています(一般)

「まちラボ」の様々な取り組みが大変興味深かった。「地域貢献」「地域の活性化」という視点での活動の広がりを感じた。「大人」の活用が増えているのではないのでしょうか。(一般)

報告③

農業が分業になってきていることに興味を持ちました。(一般)

酪農業への認識を新たにしました(一般)

稚内を知るのによい講義だと思いました(学生)

発表者(学生)

小学校3年生の社会科では必ず自分の住む市町村の学習をします。教育委員会では公費で資料本を作成します。副読本「わからない」もぜひ見てみてください。(一般)

全体

留学生との交流を持ちながらのいろいろな取り組みはとても良いと感じました。(一般)

学生の地域を学び積極的に関わっている姿勢がよかったです。(一般)

限定された時間なので厳しいとは思いますがもう少し詳しくてもよいのでは(一般)

質問・コメントがなかったのが残念ですね(本学教職員)

外部から参加していただいていることを考えると教職員の意識と改善が必要だと思う(参加人数・居眠りなど)残念!(本学教職員)

学生が成長することに対してとても活動的だと思いました。(学生)

地域活動が知ることができました(学生)

資料 (アンケート調査票)

アンケート

< お 願 い >

- このアンケートは、COC推進事業の推進と地域活動報告会等の充実を図る目的で、参加者の皆様の感想やご意見をお伺いするものです。このアンケート調査の結果は、集計して利用され、個人を特定することはありません。
- このアンケートにより得た情報の管理は、個人情報保護規程等に則り、COC推進委員会が適切に行います。ご協力のほど、よろしくご願ひ申し上げます。

稚内北星学園大学

以下、7点お伺いします。該当する番号のマークシートを丁寧に塗りつぶし、自由記述に感想をお書きください。
 ※両面印刷ですので、裏面もご協力よろしくお願ひします。

良い例 ● 1 年

悪い例 ○ 1 年 ⊖ 1 年 ⊕ 1 年 ⊗ 1 年

(1) はじめにあなたの学年 (学生のみ回答)、世代、所属をお聞きします。(1つを塗りつぶして下さい)

1	学年 <small>(学生のみ回答)</small>	① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年 ⑤ 夜間学生
2	世代	① 10歳代 ② 20歳代 ③ 30歳代 ④ 40歳代 ⑤ 50歳代 ⑥ 60歳以上
3	所属	① 一般参加 ② 学 生 ③ 本学教職員

→ ③で“1”を選択された方にお聞きします。
 具体的な所属を教えてください。(例：高校教諭)

(2) これまで、本学では地域活動報告会6回、シンポジウム2回を開催しました。何回目のご出席かお聞きします。(1つを塗りつぶして下さい)

4	① 5回目及びそれ以上 ② 4回目 ③ 3回目 ④ 2回目 ⑤ はじめて
---	--

(3) 地域活動報告会の長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つを塗りつぶして下さい)

5	地域活動報告会の長さ	① 長いと思う ② 適当な長さと思う ③ 短いと思う
6	地域活動報告会の開催時間	① 午前中がよい ② 午後の早い時間がよい ③ 午後の遅い時間がよい ④ 夜の時間がよい

(4) 今日の地域活動報告会を何で知りましたか。(複数塗りつぶし可)

7	① 新聞 ② ホームページ ③ チラシ ④ メール ⑤ 案内状 ⑥ その他
---	---

(5) 地域活動報告会に来てよかったと思いますか。(各1つを塗りつぶして下さい)

8	① 大変良かった ② よかった ③ ぶつう ④ あまり良くなかった ⑤ 良くなかった
---	--

理由をお聞かせください： _____

(6) 今後、このような地域活動報告会や講演会、シンポジウムで取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

(7) さいごに、各報告等についてご感想や激励のメッセージをお聞かせください。

報 告 ①：

報 告 ②：

報 告 ③：

全 体：

<ご協力いただきましてありがとうございました>



第9回 稚内北星学園大学COC事業

地域活動報告会

6月26日(火) 14時30分～

稚内北星学園大学 新館3階中教室

入場無料（予約不要）

■ 口頭発表

① 「プログラミング思考」とは何か
発表者：小泉真也・澁谷 久
佐賀孝博・安東雅訓

② まちラボのこれまでとこれから
発表者：田村龍一

③ COC事業「地域志向科目」の実践
～『地域学2』を事例に～
発表者：安藤友晴・横田耕一
石橋豊之
情報メディア学部学生

■ ポスター発表

① 「医療と健康のまちづくり」の実現に向けた萌芽的研究
～稚内市「医療と健康のまちづくり応援団」の活動を中心に～
発表者：佐美俊輔・米津直希
加藤良平・牧野竜二

② 次世代 e-Learning システムによる社会人学生への協働学習モデル
発表者：浅海弘保・安藤友晴
ゴータム ビスヌ プラサド
佐賀孝博・石橋豊之

稚内北星学園大学は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に選定され、稚内を始め宗谷管内の自治体と連携し、地域の課題解決に向けた地域志向研究と「地域貢献支援事業」に取り組んでいます。これまでの事業の研究成果を確かめるため、地域活動報告会を開催します。

問い合わせ
稚内北星学園大学（COC事業推進室）
☎ 0162-32-7511

問い合わせ先

稚内北星学園大学

COC推進委員会事業推進室（事務局総務課）

〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28

TEL 0162-32-7511

FAX 0162-32-7500

E-mail info@wakhok.ac.jp

わくほくCOCホームページ

<http://coc.wakhok.ac.jp/>

COC推進委員会第9回地域活動報告会実施報告書編集小委員会 委員一覧

佐賀 孝博（副学長／教授／事業推進責任者）

石橋 豊之（助教／事業推進室長）

高 澍（特任助教／学習コンシェルジュ）

第9回地域活動報告会実施報告書

2018（平成30）年9月30日発行

編 集 COC推進委員会第9回地域活動報告会実施報告書編集小委員会

発 行 稚内北星学園大学 COC推進委員会
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28
電 話:0162-32-7511（代表）
メール:info@wakhok.ac.jp

無断転載を禁じます。